

社会生物学と進化心理学の論証構造の吟味

東海大学総合教育センター

松本俊吉

shun@rh.u-tokai.ac.jp

かつて 1970 年代に E. O. ウィルソンによって提起された社会生物学は、「遺伝的決定論」のレッテルとともに、主として政治的・イデオロギー的な文脈で激しい論争を引き起こした。『社会生物学』(1975)、『人間の本性について』(1978)等に見られるウィルソンの最終的な企図は、人間の文化的行動に遺伝的・生物学的な基礎と説明を提供することにあった。その後彼は、ラムズデンとの共著になる『遺伝子・心・文化』(1981)や『プロメテウスの火——精神の起源について』(1983)において、当初の一面的な遺伝子還元的な説明戦略を修正し、「遺伝子=文化共進化モデル」と呼ぶべきものを追求した。しかしこうした(人間)社会生物学の議論に対しては、グールド=ルウォンティンの「サンマルコのスパンドレル」論文における「適応主義」批判(1978)や、キッチャーの『身の程知らずの野望』(1985)における〈破壊的〉と言ってもいいほどの批判的分析において、理論内在的な観点からも問題点が指摘された。

他方で、その後 1990 年代に華々しく登場した進化心理学は、大枠的なリサーチ・プログラムとしては、かつての(人間)社会生物学の直系に連なるものであった。すなわち進化心理学は、(人間)社会生物学者たちが注目した人間行動それ自体ではなく、その基礎にある「心理メカニズム」に注目するというより微視的な研究手法をとっている——いわゆる「ダーウィンの行動主義からダーウィンの心理学へ」の転回である——が、基本的には人間行動の基礎にある心理メカニズムのそのまた基礎には、過去の自然選択によって獲得された適応的なメカニズムが備わっている、という立場を堅持する。(したがって、男女の性差の生物学的基礎の問題や、遺伝子還元主義/決定論の問題など、現在の進化心理学をめぐる論争状況は、かなりの程度、かつての社会生物学をめぐるものと類似している。)

本報告では、こうした「人間の文化・行動・心理・本性を自然化する」社会生物学から進化心理学への流れを概観し、それらの方法論ないしは論証構造という観点から——別の言い方をすれば、それらをリサーチ・プログラムとして見たときどこまで「前進的な」ものたりえているかという観点から——、批判的に検討する。その際私は、社会生物学や進化心理学に見られる一部の安易な‘just-so-story-tellers’ (もっともらしい物語制作者) からも、また他方でそうしたセンセーショナルな主張の表面的な理解に基づいた単に感性的・情緒的な嫌悪を表明するタイプの批判者からも距離をとり、できる限り先入見を排してその論理構造を吟味する——とは言え、分析者がいかなる先入見からも完全に中立であることは不可能であるが。

こうした分析によって提起される一つの科学哲学的な問題は、(遺伝子)還元主義の問題である。還元主義は、科学研究における一つの発見法的な研究戦略として、いまだ説明を提供されていない複雑な現象に探求のメスを入れ、それをより理解可能な単純な要素に分解していくために有用な(起点)を提供するものであり、それ自体は否定されるべきではない。しかし問題は、しばしば——特にこうした研究成果が一般化・通俗化される局面で——還元主義が還元主義であることが忘却されやすいという点にある。こうした還元主義のいわば「フェティシズム」(物象化)を常に対自化し、冷徹な観察眼を向け続けていくところに、消極的な役回りではあるが「批判的科学哲学」の一つの意義が存しているのかもしれない。